

国際地域文化コースの課題と展望

アレクサンダー・ギンナン

Challenges and Prospects for the Studies of Global and Regional Cultures

Alexander GINNAN

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 第16巻 第2号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.16 / No.2

令和2年 1月 31日発行 January 31, 2020

国際地域文化コースの課題と展望

アレクサンダー・ギンナン*

Challenges and Prospects for the Studies of Global and Regional Cultures

Alexander GINNAN*

キーワード：国際，移動，多文化社会，地域

Keywords: international, migration, multicultural society, region

2017年度に鳥取大学地域学部の改組に伴って「国際地域文化コース」が新設され、「国際」を冠した看板を掲げることとなった。本コースの前身は「地域文化学科」であり、「国際」を追加した理由のひとつは旧名称がいささか狭い響きをもっていたからである。もちろん、地域学部は設立当初から地元（鳥取とその周辺）はじめ他の小規模地域を重視してきた。しかし、同時に海外を含む多重のスケールおよび多様な意味の地域と文化を専門とする教員が学生に幅広い教育を提供していた。改組を通じてこの実態を名称として表現した結果、「国際地域文化コース」となったが、しっくり来ない点が残ってしまった¹。それは、「国際地域文化コース」が一般的に複数の国家間の関係を指す「国際」（あるいは、コース名の英訳の場合、地球規模を意味する「グローバル」と、特定範囲の区域を示し、ローカルのニュアンスも含む「地域」という一見対立しているかのような言葉をあえて併せていることに起因している²。この乖離に応じる新しい教育内容が必要であり、それを打ち出す場として本コース1年生の必修科目「国際地域文化序説」がある。以下において2018年度後期に実施した「序説」を振り返りつつ、授業のあり方および「国際」と「地域」を名実ともに併せて考えた場合に開かれる可能性について検討する。

2018年度の「国際地域文化序説」

「国際地域文化コース」を志望して入学した学生は、1年目の前期からコースの教員が担当する専門科目を履修している。しかし、新入生が最初に受け

る「国際」をキーワードとしたコース必修科目は後期開講の「国際地域文化序説」である。科目名が含意するように、「序説」は「入門」以上の授業として位置付けられている。多くの学外講師がかかわっている学部共通科目「地域学入門」と「地域学総説」とは異なり、「序説」ではコースの専任教員のみが講義を受け持つ。それは、「序説」を通して講義担当者間で新たに編制されたコースの展望を見出すためである。もちろん、これはそう簡単にできることではなく、本稿もこの目的に近付くための個人的な見解に過ぎない。まずは、初回のオリエンテーションと最終回の総括を除いて2018年度に実施した教員11名による13回の講義（以下、第2回～第14回と表記）について簡潔にまとめることにする。各講義の日付、題目、担当者などの詳細については、本稿末尾に授業計画表を添付している。「序説」を開始した2017年度に比べると、2018年度は多少のメンバーの入れ替わりと新しい講義の追加があったものの、授業全体の流れにはさほどの変化はない。したがって、授業内容の詳しい説明については、昨年度の「序説」の結果をまとめた論文（柳原、2018年）を参照されたい³。

「国際地域文化序説」は、ホモ・サピエンスの誕生から現在に至るまでの期間に渡るが、重点は近代以降の時代に置かれている。第2回と第3回の講義では、人類の始まりを起点に狩猟採集の遊動生活から約1万年前に起きた「定住革命」、そしてそれがもたらした農耕による食糧生産への転換をたどった⁴。「序説」をこのような考古学的な過去から始めるこ

*鳥取大学地域学部 国際地域文化コース

とにより、定住生活は本来、人間にとって当たり前ではなかったことを確認し、「移動」を授業の主要なテーマのひとつとして設定した。

もとより、移動と定住を単純な二分法として捉えることはできない。いずれも利点があれば不利な面もあり、状況によってその度合いが異なる。「序説」では、この実態を検証している。第4回から第7回の講義では歴史学の観点からフランス、チェコ、中国、日本といった特定の国に焦点をあて、国民国家（中国の場合は王朝）が形成される様々な過程を明らかにしながら、国民統合における宗教、言語や民族の働きについて取り上げた。第4回ではフランス革命の歴史に集中し、多様な社会集団が税金などと引き換えに国王から限定的な自律性を与えられ特定集団の規範に従って生きる体制から、17世紀に生まれた啓蒙思想、18世紀末の人権宣言と新たな秩序概念への変革を通して得られたもの、得られなかったものと失われたものについて考察した。次に第5回の講義では、チェコのハプスブルク帝国からの独立に先立って18世紀から19世紀前半の間に展開したスラヴ文化と民族再生運動を中心に、チェコ・ナショナリズムの特徴を跡づけた。その後、東アジアの事例へと移り、第6回では中国の清朝（1644～1912年）と「華夷秩序」の思想の下で図られた多様な民族と文化間の秩序が主題となった。第7回の講義では宗教に的を絞り、日本における西欧文明との接触とその後の変遷について検討した。

続いて第8回から第10回の講義では特定の国の事例から一国におさまらない動きに視点を切り替えた。第8回では、第二次世界大戦までパリを拠点に活動していたシュルレアリスム運動の芸術家が、ファシズムから逃れるためにニューヨークへ亡命し、アメリカの抽象表現主義の誕生に一役買うプロセスを概観した。ここでは「移動」に加えて「創作活動」も授業の主要なテーマのひとつとして導入されている。第9回の講義ではグローバリゼーションが主題となり、大航海時代、植民地主義、大西洋奴隷貿易、20世紀に起きた2度の世界戦争による人の移動から「晩期資本主義」や「新自由主義」が代名詞となっている現在の「グローバルな時代」における国民国家の揺らぎやそれに伴う同質化と異質化の拡大について考察した。これに関連して第10回では、英語の成立と世界的広がりに着目し、紀元前4000年頃に遡る英語の印欧祖語としてのルーツからブリテン島で展開した様々な民族紛争と言語接触、それ以後の英語の整備と世界進出の歴史を顧みた。

第11回から第14回の講義ではグローバリゼーシ

ョンの諸問題を踏まえた上で現代の個別地域や人物の事例を取り上げた。まずは、第11回で視覚メディア（映画、テレビ、写真など）を元に日本の高度経済成長と並行して拡大した「郊外」に集中し、風景の均質化の問題に迫った。次いで第12回の講義では、1980年代以降に産業構造の変化の影響で起きた不安定就労、長期失業、ホームレスの問題の対策としてイギリスで始まった「社会的包摂」の取り組みを軸に、各地で行われている文化活動を通じた多面的支援の可能性について検討した。イタリアで暮らすホームレスによる新聞『ピアッツァ・グランデ』の発行や、パラグアイでゴミ収集を通して子供に楽器作りと演奏の機会を与える「リサイクル・オーケストラ・オブ・カテウラ」の活動などがその検討材料となった。第13回の講義では植民地化、移民政策、人種差別、先住民の権利を視野に入れながら、カナダの多文化主義から学べる点について考察を重ねた。最後に第14回は、日本で生まれイギリスで育った小説家カズオ・イシグロの文学作品を通して移動による記憶やアイデンティティの浮き沈みを解釈する試みとなった。

以上が2018年度に実施した「国際地域文化序説」の概要である。オリエンテーションと総括を除いた核となる13回の講義は、大まかに4つのセクションに分けることができる。すなわち、①定住以前の人間の生活、②国民国家形成と国民統合、③国境を越える多様な動き、④現代の人間と文化。現在の人員から可能な限り幅広い国の事例と国の枠を越えるマクロな主題を編み出した結果である。成績評価の面では昨年度と同様に最終試験を実施し、授業全体の内容を簡潔にまとめるとともに複数の講義から共通のキーワードないしテーマを汲み取り、その関係性について論じるように求めた。これに対して、多くの学生から実質のある解答が出た。一方、「国際地域文化コース」と「国際地域文化序説」という名称を使用しているだけに、教員側では「国際」と「地域」の両方を反映した内容を授業に組み入れなければならない。次節において、改組後の地域学部にとって最も新しい要素とも言える「国際」という言葉を中心にこの課題について考えたい。

「国際地域文化」の「国際」とは何か

冒頭で「国際」の一般的な定義に言及したが、この言葉の意義は時代によって異なり、論者の間でもそのあり方について見解が分かれている。ここでは論点を絞るために2018年度の「国際地域文化序説」

の文脈で「国際」の意味について検討したい。「序説」における「国際的」な要素は、授業が進行するにつれて変化している。まずは、第4回から第7回の講義では、毎回異なる国の事例が主題となっていることから「国際的」だと言える。このセクションでは、いずれの講義も国家単位で過去を概観している。一方、第8回以降の講義では、一国におさまらない動きと現在に至るまでの時代が主題となる。したがって、ひとつの講義において複数の国の事例（あるいは複数の国にまたがる事例）を扱ったり、主に一国に集中していても、その国の中の移民やマイノリティについて取り上げたりしている。つまり、授業の前半とは違う形で「国際的」である。2018年度の「序説」を実施していた期間中に起きたいくつかの出来事は、後者のような「国際」の多重の次元に注意を向ける重要性和必要性を痛感させた。授業と並行して報道された以下のようなニュースは、「国際」という言葉を冠した授業とコースのあり方について改めて考えるきっかけとなった。

2018年10月13日、中米ホンジュラスから徒歩でアメリカの国境へ向かう約2千人の「移民キャラバン」が出発したことは、各地のニュースメディアで大きく報道された⁵。11月になると、グアテマラやエルサルバドルからの移民も加わった集団の人数は約9千人に増加していた⁶。これらの人々は、自国における貧困や治安の悪化を逃れるためにアメリカへ向かって動き出したのである。11月15日以降、徐々にアメリカの国境に到着し、25日に数百人が違法入国を試みると、国境警備隊は催涙弾を放ち42人を逮捕した⁷。1万人近い人々は国境のメキシコ側（ティファナ市）の避難所に留め置かれ、アメリカへの難民申請が認められるのを待ったものの、ほとんどが却下された。

中米から大勢の人々が徒歩でアメリカの国境を目指すのは、新しい現象ではない。少なくとも15年前から移民労働者を支援する非営利団体の案内で数百人から千人規模の集団が難民申請をしているが、認められたのはわずかである⁸。10月13日にホンジュラスを出発した集団は、これまでとは違って非営利団体の呼びかけに導かれたのではなく、自発的に形成された。また、SNSを通じてこれまでにはない規模の人数に増加した。そして何よりも、これについてのニュースはマスコミに大々的に報道され、これまでほとんどの人の目に触れることのなかった「キャラバン」の姿が映像として世界中に広がるようになった。多くの論者は、アメリカの大統領が2018年11月6日の中間選挙に向けて、保守派の支持を固

めるために「キャラバン」に対する不安と恐怖を掻き立てながら、不法移民対策の強化を争点にしたと指摘している⁹。

「移民キャラバン」に関するニュースに次いで、12月8日には日本で「外国人労働者」の受け入れ拡大に向けて出入国管理及び難民認定法の改正案が参院本会議で可決・成立し、大見出しで報道された¹⁰。この改正は、少子高齢化による人手不足の問題に応じる対策とされている。2019年4月から5年間にわたって単純労働を担う約34万5千人の人材を受け入れることになった¹¹。もちろん、以前から多くの外国人は日本で多様な形で仕事をしている。厚生労働省によると、2018年10月の時点では約146万人の外国人が日本で働いていた¹²。今回の出入国管理及び難民認定法の改正によってこれまで単純労働に従事してきた「技能実習生」の5年に限定された在留資格から、段階的に更新できる新しい「特定技能」の資格に切り替えられるようになったのである。

このようなニュースは、重要な示唆を与えてくれる。「序説」は、世界地図が示す国々について学べるという意味の「国際」ととどまってはならない。地図上の境界線が区分する各国や地域の中の多様性を明らかにし、国境を越える動きや事象および多文化社会における課題について考えることが不可欠である。今の時代に大学でグローバルな移動に関する授業を行っていること自体は珍しくない。そこで、「序説」の特徴を整理すると、一貫している要素として主に二つ挙げることができる。まずは、現在と過去との関係性を重視している点である。「序説」は、遊動生活から始まり、複数の国民国家形成の事例を経て現代の課題について取り上げている。このような歴史的アプローチは授業の全体構成だけでなく、単独の講義の一部にも見られる。もうひとつの特徴としては、科目名が表すとおり、「国際地域文化序説」は「国際的」であると同時に「地域的」である。次節では、筆者が担当した「カナダにおける多文化主義」の講義を中心に、この二つの特徴について検討したい。

現代への歴史的、地域的アプローチ

周知のとおり、現代カナダの人口は多様性に富んでいる。カナダにおける多文化主義は、1971年に国の政策として導入され、1988年には法律として採択された。しかし、カナダの多文化社会の形成過程について理解するには、1988年や1971年より遙か前に遡らなければならない。それはカナダの移民政

策が植民地化と国の開発とともに進められてきたからである。また、カナダの面積が広いこと、国の開発は段階的に進み、移民の受け入れ状況も地域によって異なった。したがって、現代カナダについて検討するには歴史的な視点のみならず、地域的なまなざしも重要である。以下においては、19世紀後半にアジアからカナダに渡った初代移民が集住していたブリティッシュ・コロンビア州バンクーバー市中心街の東部地域(イースト・サイド)に焦点をあてる。カナダの多文化社会の形成を歴史的に、そして地域的に捉えることは、本コースで「国際」と「地域」の両方の視座を重視している意義を探るための手がかりになる。

現在のカナダは10の州と3つの準州で構成されており、人口は約3705万人であるが、カナダが自治領として設立された1867年には、4つの州(オンタリオ州、ケベック州、ノバスコシア州、ニューブランズウィック州)のみで成り立っていた¹³。人口は約300万人で、その3分の2がイギリス系、3分の1がフランス系の入植者であったと言われている¹⁴。しかし、この統計には先住民が含まれていないため、実際の総人口は反映されていない。後述するとおり、先住民は西洋人の入植以来、植民地化を通じて土地と自治権を奪われ、圧倒的に不平等な立場に置かれながら暴力と弾圧を受けてきた。

1867年以降、わずか10数年でカナダ政府は海外からの移民を誘致しながら西へと領土を拡大した。中西部の草原地帯では、小麦栽培を中心とする農業に従事できるスウェーデン、ウクライナ、ポーランド、ロシア、ハンガリー、ルーマニア、オランダ、ドイツなど北欧や東欧からの農民を受け入れた¹⁵。この政策には白人系の移民を優先するエスニック・ヒエラルキーがあったため、中西部地域の開発計画には黒人やアジア人など有色人種の移民は含まれていなかった。

カナダを現在の規模に発展させるには、政府は草原地帯の開拓に加えて、東と西の地域をつないで国を統合する必要があった。それは、カナダ太平洋鉄道の建設によって実現されることになった。太平洋に面する最西のブリティッシュ・コロンビア州は、1871年にカナダの6番目の州として加盟した。この年に行われた国勢調査によると、州の総人口は約36,000人で、そのうち先住民が約25,000人、白人系の入植者などが約9,000人、そして中国人が約1,500人暮らしていた¹⁶。この時期にカナダに在住していた中国人は、フレーザー川流域での金の発見に引き付けられてアメリカから一時的に渡ってきたと思わ

れる。中国人の定住の歴史は、その後、ブリティッシュ・コロンビア州の山岳地帯で行われたカナダ太平洋鉄道の建設工事を発端に本格的に始まるのである。1881年から1885年の間に約15,000人の中国人が低賃金労働者としてカナダに流入し、鉄道の工事を担ったが、過酷な労働により多くの死者が発生した¹⁷。線路1マイルにつき一人が犠牲になったと言われている¹⁸。そして、1885年に鉄道が完成すると政府は中国からの更なる移民を締め出すために50ドルの人頭税を導入し、20世紀に入ると500ドルに引き上げた¹⁹。

カナダにおける文化的多様性の象徴となるバンクーバー市のチャイナタウン(中華街)もこの時期に形成された。チャイナタウンは、中心街東部のペンダー・ストリート周辺に位置する²⁰。カナダに移住してきた初代中国人がこの地域で暮らすようになった理由は少なくとも二つ挙げられる。ひとつは、カナダ太平洋鉄道の終点が中心街のコール・ハーバーまで延長され、その工事が完成した後、多くの中国人労働者は近くの製材工場で働くようになったからである²¹。また、ペンダー・ストリートは、フォルス・クリークという入江の水に覆われる沼地のような低開発地域であった²²。このような劣悪な環境や高額の人頭税にもかかわらず、中国人移民の人数は増加し続けた。低賃金労働者の需要が大きかったため、移民の受け入れが継続したのである。しかし、1887年2月24日、中国人の排斥を訴える白人労働者の危機感が爆発した。その夜、約300人の排斥運動支持者はコール・ハーバーに暮らす中国人を攻撃し、彼らの仮小屋を破壊して所有物に火をつけた²³。さらに、ペンダー・ストリートと交差するカラール・ストリートにある中国人約90人の住宅にも放火した²⁴。これがカナダでの中国人移民に対する最初の集団的暴力事件であった。このような襲撃を受けても1889年までには29の中国人経営会社や店がペンダーとカラールに立ち並び、ペンダー・ストリートのひとつ北にあるヘイスティングズ・ストリートには中国人学校も出来ていた²⁵。

チャイナタウンの東端から一ブロック北へと歩くと、旧ジャパントウン(日本人街)がある。現在は、その痕跡となるものとしていくつかの古い看板や寂れた空き家しか残っていない。しかし、1940年代まではチャイナタウンのペンダー・ストリートと並行するパウエル・ストリートを中心に多くの日本人移民や2世が生活していた。日本からカナダに渡った最初の移民は、1877年に船乗りとして働いていた船から降りて偶然バンクーバーに住み着いた長野万蔵

という人物だと言われている。その後、日本からの移住が本格的に始まったのは、1887年にバンクーバー港の建設が完了し、横浜とバンクーバーの間で定期航路が開いてからである²⁶。1900年にカナダ在住の日本人移民は約5000人だったが、1907年になると約8000人に増加した²⁷。この時代に日本の農村における米価の低落、地租の重税、凶作などによる不況が海外移住の要因となった。カナダに渡った移民は、漁業、炭鉱、山林伐木業などの仕事に従事し、20世紀に入ってもほとんどはブリティッシュ・コロンビア州に集住していた。このような背景の中、バンクーバーのジャパントウンが形成された。

19世紀末に中国人の増加に加えて、大勢の日本人も同じ地域で暮らすようになったことは、カナダを白人の国として保ちたい人々にとって大きな問題であった。1907年9月7日、同年の夏に形成された「アジア人排斥同盟」バンクーバー支部の集会の後、東洋人の排斥を訴える群衆がチャイナタウンとジャパントウンで暴動を起こし、多くの住宅や店を破壊した²⁸。日本はイギリスと日英同盟を結んでいたため、日本政府がジャパントウンの人々が被った損害に対して賠償を求めると、カナダ政府は機敏に応じた。それと同時に、日本からの移民を制限するための措置も取った。暴動の約一か月後にカナダの労働大臣ルドルフ・レミューが日本に派遣され、日本政府と交渉した結果、1908年、「レミュー協約」が結ばれた²⁹。これによって日本からカナダに入国する移民の数は大幅に減少した。ところが、カナダに在住する日本人男性の配偶者や子供の入国は許されていたため、協約成立の直後に女性移民の割合が増加し、労働者の入国が厳しく制限される中、カナダで生まれる2世が増えた。そのため、1928年に「レミュー協約」が改訂され、一年間に入国できる女性を含む移民の人数はさらに減らされた。

最終的にジャパントウンの衰退は、第二次世界大戦中にカナダ政府が行った日系人政策によって決定づけられた。1941年12月7日（太平洋標準時）の日本軍による真珠湾攻撃の後、カナダ政府は対日宣戦を布告し、カナダに住んでいる日本にルーツのある全ての人々を「敵国人」と規定した。その後、1942年3月16日に日本国籍の移民、帰化人、カナダ生まれの日系人全員（約21,000人）が、ブリティッシュ・コロンビア州の太平洋岸から約100マイル東の収容所や労働現場へと強制的に移動させられた³⁰。戦争が終わると、カナダで住み続けたい人は、ブリティッシュ・コロンビア州外に拡散するように命じられ、そうしなかった場合は日本へ送還された。1949年に

ブリティッシュ・コロンビア州に帰還することが許されるようになったが、戦前の居住地に戻る人は少なかった。

一方、中国人に対してカナダ政府は、1923年に人頭税を廃止する代わりに、特定の資格所有者以外の入国を完全に禁じる移民法（中国人排斥法）を導入した³¹。これによって、一般の中国人は1960年代に移民法が改正されるまでカナダから締め出され、男性労働者が大半を占める中国人人口は徐々に高齢化し、減ることになった。

ようやく、1960年代に移民法が改正され、白人系の欧米人を優先する移民政策から教育や言語能力によるポイント制の受け入れ制度に移行した。そして、1971年に政府はフランス語と英語の両方を公用語と認める二言語政策と並んで多文化主義の政策を導入し、1988年には多文化主義法を議会で通過させた。この間、1961年から1971年にかけてバンクーバー市に在住する中国系住民は15,223人から30,640人に急増した³²。また、1960年代以降にカナダに移住した中国系移民の多くは英語が堪能な香港出身者で、低賃金労働ではなく、高収入の専門職に就いた。80年代には香港から大勢の移民が流入したが、膨大な資金もバンクーバーに投資されるようになった。例えば、1988年12月に香港の投資家はフォルス・クリークの南岸にある216軒の高級マンションを一気に購入し、バンクーバーのニュースメディアを当惑させた³³。現在、一般の中国系住民はチャイナタウンで暮らすわけではなく、バンクーバー市内各地で生活している。2016年の国勢調査によると、当時のバンクーバー市の人口は631,486人で、自らの民族的ルーツについて「アジア系」と答えた住民は306,450人（48%）、そのうち「中国系」と答えたのは175,200人（27%）であった³⁴。つまり、百年前は中心街東部に集住していた「アジア系」住民は市の人口の半分近くを占めるようになったのである。

以上、荒く描いた歴史は、紙数の限りもあるため、主に20世紀前半にバンクーバー市中心街の東部地域で暮らしていた中国人と日本人移民の経験に限定している³⁵。それでも浮き彫りになってくるのは、現代カナダの多文化社会は多難な道りを経て形成されてきたということである。そして、今も多くの問題が残存する³⁶。その中でも特に顕著なのは先住民の権利を巡る問題である。「バンクーバー」という地名は、18世紀末にカナダの西海岸で測量調査を行ったイギリスの探検家ジョージ・バンクーバーに由来するが、そのように名付けられる遥か以前からマスキーム族、スクワミッシュ族の先住民が暮らして

いた。植民地化に伴う条約によって先住民は国が管理する居留地に押し込められ、多くの子供は親元から引き離されて宗教と英語を通じた同化教育を受けることになった³⁷。2015年に発表された「真実と和解委員会」の報告書によると、先住民の子供約150,000人が寄宿学校で過ごし、そこで受けた病気や虐待によって多くが死亡したとされている³⁸。

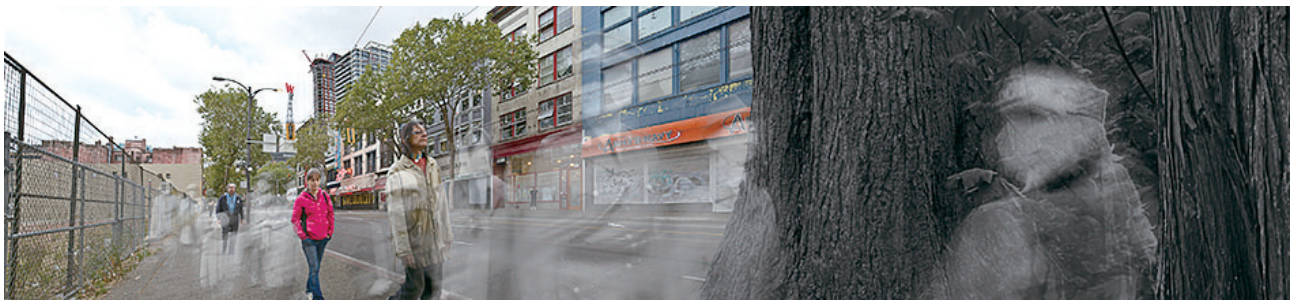
本稿の前半において「国際地域文化序説」の主要なテーマのひとつは「創作活動」であると述べた。「カナダにおける多文化主義」の講義でも、二つのアート作品を通してバンクーバー市中心街の東部地域について検討した。ひとつ目は、2002年6月23日にアニシナア族の女性アーティスト、レベッカ・ベルモアがチャイナタウンと旧ジャパントウンの境目にあるコルドヴァ・ストリートとゴア・アベニューの交差点で執り行った儀式のようなパフォーマンス作品 *Vigil* (通夜) である。「序説」では、その記録動画を紹介した。初めにベルモアは、歩道の表面をバケツに入れた水とたわしで磨く。次に、観客の男性にライターを渡し、地面に並べてある蝋燭に火をつけるように指示する。その間、ベルモアはマジックで両腕に書いた多数の女性の名前を大声で叫び、薔薇の茎に噛み付いて唇に切り傷を負いながら茨と花びらを剥がし取る。女性の名前一つずつに対して、この行為を繰り返す。その後、真っ赤なワンピースをまとい、とんかちを構え、スカートを釘で近くの電柱に打ちつける。そして、ドレスを破りながら電柱からむしり取る。ドレスが細切れにちぎれてなくなるまでこの行為を繰り返す。

かつて、この中心街東部の一郭は、チャイナタウンとジャパントウンと同様に、近くの製材工場で働く労働階級が生活する場所であった。中心街東部は、移民が集住し、労働階級が通う飲み屋や夜遊びの施設も多かった。第二次世界大戦の後には、産業構造の変化と工場の郊外・海外移転に伴って低所得者、失業者、ホームレスやセックスワーカーの比率が多い

地域として知られるようになった³⁹。そして80年代以降は、グローバリゼーションに伴う人の移動の急増と海外資本の投資に応じる再開発計画が進むにつれて、バンクーバー市内の住宅費は上昇し、貧困層の生活は益々苦しくなっている。

1978年頃から *Vigil* の舞台となった中心街東部の周辺から多くの女性が行方不明になる事件が相次いだ。しかし、バンクーバー市の警察がこの問題を公にして行方不明者のポスターを発表したのは、20年後の1998年である⁴⁰。ベルモアは *Vigil* を通じてこの地域から誘拐され、殺害された女性を追悼している。中心街東部で起きた一連の事件は、女性を巡る問題だけではなく、先住民女性に深くかかわる問題である。2005年の時点では、中心街東部の人口約16,000人のうち40%は先住民と推定された⁴¹。2014年の統計によると先住民の女性はカナダの女性人口の約4%に過ぎないが、カナダで殺害された女性の16%も占めている⁴²。このように先住民、人種、ジェンダー、階級などを取りまく問題は、多文化社会の裏面に数々存在する。

「序説」で紹介した二つ目の作品は、グレッグ・マスダという映像作家による2010年の合成写真 *Dispossession* (追い立て) 【図1】である。マスダの作品は、バンクーバー市中心街東部の過去と現在を重層的に表している。カラーで写っているのは、2000年代のヘイスティングズ・ストリートの街並みであり、画面の中央から左側に向かって寂れた建物が立ち並ぶ。古いホテルなどの2階以上の階は、低所得者や失業者が住むワンルーム・アパートである。背景には、新しい高級マンションやオフィス・ビルの建設工事が見られる。最も遠方には、20世紀初期からバンクーバー市中心街の買い物拠点として賑わっていたウッドワードズというデパートのロゴマークを飾ったタワーが立つ。画面の左側には、3人の歩行者が歩く。同時に、3人の周りに幽かに見える半透明な人物が漂う。そして、大きな木の幹が右側の



【図1】 Greg Masuda *Dispossession* (2010)

前景を占め、その上にも人影が写っている。マスタのメッセージは鮮明である。現在、再開発計画によって低所得者や失業者はこの地域で暮らせなくなっている。しかし、中心街東部の住民が住めなくなったのは初めてではない。現在の状況は、第二次世界大戦中にジャパントウンから立ち退かされた日系人の歴史と重なる。さらに遡れば、植民地化とカナダの建国によって、先住民も強制的に移動させられた。この地域では、「追い立て」の経験が何度も繰り返されてきたのである。

近年、日本から多くの若者が、観光、留学、ホームステイ、ワーキングホリデイなど様々な目的でカナダを訪問している⁴³。短期間の滞在であっても、特にバンクーバー、トロント、モントリオールのような大都市を訪ればカナダの多文化社会を実感するに違いない。その一方で、この多様性に潜む歴史を認識している人はどれだけいるのだろうか。「国際地域文化序説」で歴史を重視しているのは、学生にカナダやバンクーバーについて詳しくなりたいからではない。いかなる国や地域であれ、現在の姿がどのような道のり、どのような国や地域との関係性を経て形成されてきたのかについて考える姿勢を培うためである。

地域から国の際に迫る

最後に、「地域」という言葉に含まれている「ローカル」のニュアンスについて検討したい。鳥取大学の地理的位置を考えると、「ローカル」は地元の鳥取市、鳥取県、山陰地方などから始まる。地域学部であるからこそ、こういった意味の「地域」を重視することは大切であろう。

地域学部では、「地域調査プロジェクト」という2年生の必修科目を設けている。これは、実習形式で行われる毎週2コマ連続の通年授業である。コースによってその進め方は異なるが、「国際地域文化コース」では毎年教員側で複数のテーマ（調査班）を企画して、学生はその中からひとつを選び、一年間かけて協働で調査を進める。科目名が示唆するように、多くの場合、鳥取が調査の対象地域となる。授業を通して学生たちは様々な調査・研究方法を学びながら調査班のテーマについて知識を深め、卒業後にも役に立つ批判的思考力、創造的表現力、コミュニケーション能力などを身につける。そして授業の大詰めとして、学生はコース主催の公开发表会で調査結果を報告し、報告書を作成する。

「地域調査プロジェクト」も学部の改組に影響さ

れている。新しいコース名に対応するために、この授業にも「国際」と「地域」の両方を反映した内容を含める必要がある。実は、改組前から海外の地域を調査対象とした企画や鳥取に在住する「外国人」を取り上げる調査は何度も行われてきた。その反面、「ローカル」な歴史と文化に着目した調査活動や鳥取で特定のテーマについて現状を調べる企画も多い。いずれも学生にとって教室の外で能動的に学ぶ重要な機会となっている。しかし、これまでの企画の立て方には「国際的」なテーマとそうでないテーマを選択肢のように学生に提示していた傾向が多少あったことは認めざるを得ない。当然、「グローバルな時代」とは言え、「国内」と「国外」の間には明確な相違点が数多く存在する。同時に、「国際地域文化コース」と銘打つようになっただけに、このような二元論の問題点と限界も教育に取り入れるべきである。本稿の結びにかえて、筆者が2019年度から2年生9名を対象に教員2名と共同で行っている「地域調査プロジェクト」のテーマを紹介しながら、「国際」と「地域」の関係性を再考するための糸口を提示したい。

鳥取県岩美町の海岸沿いの入り江に孤立した一軒家が建つ。これは、岩美町出身の外交官澤田廉三と結婚した澤田美喜が1937年に別荘として使用するために建てた家である⁴⁴。1950年代から80年代にかけて、多くの子供たちが夏をこの別荘（鷗鳴荘）で過ごした。しかし、彼らは地元の子供ではなかった。

周知のとおり、第二次世界大戦の後、日本は7年間(1945-1952年)連合国によって占領されていた。その期間に、占領軍と日本人の間で多様な人間関係が展開し、占領兵と日本の女性の間で子供が生まれるケースも多かった⁴⁵。残念ながら、両親に遺棄される子供も少なくなかったため、占領期にはいわゆる「混血児問題」が発生した。澤田美喜は、この問題に対応した重要人物の一人である。1946年に神奈川県大磯町に児童養護施設エリザベス・サンダース・ホームを設立し、多くの「混血孤児」と呼ばれた子供を受け入れた⁴⁶。そして、1950年代から岩美町の別荘を臨海学校として活用し、ホームの子供たちが夏を鳥取県で過ごすようになった。

鷗鳴荘と澤田美喜の活動を出発点とした「地域調査プロジェクト」は、「国際」と「地域」を別物として見なす考え方の問題点と限界を浮かび上がらせる。この授業では、「地域」を調査することが前提となっているため、まずは「ローカル」から始めた。学生たちは、鷗鳴荘の視察や澤田廉三・美喜について詳

しい地元の専門家の聞き取りからこの調査プロジェクトに乗り出した。地域学部として、このような地域の資源に着目し、地元関係者の協力をいただくことは大いに意義があるものの、このプロジェクトの場合、「ローカル」な要素は調査のきっかけとなっているが、到達点ではない。むしろ、「ローカル」という意味の「地域」を調査することは、地元と他の地域の人々の関係性について知ることでもある。このプロジェクトの場合、「ローカル」なつながりは「国の際」を貫く。澤田美喜の活動の拠点はエリザベス・サンダース・ホームであるため、鷗鳴荘を巡る歴史を理解するには、まずは神奈川県大磯町で展開された活動全般を把握しておかなければならない。その時代背景となる占領期は、戦勝した側と敗戦した側が一国内で共生している必然的に「国際的」な状態であり、ほとんどの学生にとって高校までの教育で学んだことのない「国際」の次元である。占領期に生まれたいわゆる「混血孤児」は、日本人の母親と外国人兵士の父親の両方に遺棄されたため、どの国に帰属すべきなのかについて議論は分かれた。最終的に、ホームの子供たちの多くは養子として海外で暮らすようになった⁴⁷。

以上のように、現在進行中の「地域調査プロジェクト」の事例は、具体的に地元と関係しながら海外にも展開し、「国際」と「地域」を対立あるいは矛盾するものとして扱う考え方の問題点と限界を際立たせる。「国際地域文化コース」を名実ともに確立するためには、今後も様々な角度から新しい名称に応じる教育内容を開発するとともに、他の事例を見出していくことが重要になるだろう。

本稿は、2018年度の「国際地域文化序説」を振り返りながら、改組して2年目を迎えた「国際地域文化コース」の課題と展望を鑑み、特に「国際」と「地域」の両方を取り入れた教育内容の可能性について考察した。以上は、筆者独自の考えであり、必ずしもコース全体の意見を反映しているわけではない。「序説」の概要を一見すると明らかになるように、本コースの構成員は、肯定的に捉えれば多様であるが、端的に言うとバラバラの向きに置かれている。また、本コースには退職を控えている教員が複数所属しているため、今後も継続的に「国際地域文化序説」および「国際地域文化コース」の内容を刷新していかなければならない。その過程で様々な困難が予想されるが、肯定的に捉えれば、これは動く標的とも言える現代の地域と世界に応じるための最適な契機にもなりうるかもしれない。

2018年度国際地域文化序説授業計画

2018年度「国際地域文化序説」	
1. 本授業の構成	
1回 10/2	オリエンテーション (アレクサンダー・ギンナン/柳原邦光)
2回 10/9	遊動と定住の人類史 (高田健一)
3回 10/16	食の人類史 (高田健一)
4回 10/23	近代世界の構造 (柳原邦光)
5回 10/30	東中東地域の小国チエコにおける「スラヴ・ルネサンス」(内藤久子)
6回 11/6	近世の東アジア世界 (柳静我)
7回 11/13	日本の近代化と宗教—西沢近代の到来と日本の反応 (岸本寛)
8回 11/27	美術と近代 (筒井宏樹)
9回 12/4	グローバリゼーション (アレクサンダー・ギンナン)
10回 12/11	英語の成立と広がり (中尾雅之)
11回 12/18	グローバリゼーションにおける文化の変容とその記録 (佐々木友輔)
12回 1/8	社会的包摂と文化芸術：欧州の事例から (川井田祥子)
13回 1/15	カナダにおける多文化主義 (アレクサンダー・ギンナン)
14回 1/22	カズオ・イングリッド論 (長柄裕美)
※ 1/26	地域調査プロジェクト成果発表会
15回 1/29	総括 (柳原邦光)
※ 2/5	試験
2. 評価について	
(1) 授業ごとの評価について	
・講義/10分小テスト：講義のなかで重要なポイントを記述する	
2~14回 (13回×5点=65点) ※ 5点評価では小点数以下の評価はしない	
(2) 地域調査プロジェクト成果発表会への参加	
・2019年1月26日(土) とりぎん文化会館で開催	
・感想文の提出 (10点)	
(3) 全体を踏まえての試験	
・2019年2月5日(試験期間)に実施/60分小論 (25点)	
(1)~(3)合計 100点満点	

謝辞

本稿を執筆するに当たって、同コースの柳原邦光先生に多くのアドバイスをいただき、作品画像の掲載に関してはグレッグ・マスダ氏およびシェリー・カジワラ氏のご協力をいただいた。末筆ながら記して感謝の意を表する。

注

- 新しい名称の英訳を決める際、コースの教員は「国家」(nation)の単位を強調する「国際」(international)を避けるために、「グローバル」という言葉を採用した。日本語の名称と英訳の差異は本稿の題目にも反映されている。
- 例えば『広辞苑』によると、「国際」の定義は「諸国家・諸国民に関係すること」である。一方、「地域」は多義的であり、①「区切られた土地」や「土地の区域」、②「住民が共同して生活を送る地理的範囲」、③「数カ国以上から成る区域」、④「国際社会で、独立国ではないが、それに準ずる地位を広く認められている領域」などが挙げられている。新村出編『広辞苑 第七版』岩波書店、2018年、1027、1857頁。

- ³ 柳原邦光「国際地域文化序説」『地域学論集』第15巻第1号、鳥取大学地域学部、2018年、57-69頁。
- ⁴ 「定住革命」については、西田正規『定住革命—遊動と定住の人類史』新曜社、1986年を参照。
- ⁵ 岡田玄「ホンジュラス 米国移住求め2千人」『朝日新聞』2018年10月17日、2頁。Kirk Semple. “Trump Warns Honduras Over Migrant Caravan.” *New York Times*, October 17, 2018, p. A8
- ⁶ 岡田玄「仕事を未来を 米国へ歩く「移民キャラバン」 中米から9000人」『朝日新聞』2018年11月5日、1、6頁。
- ⁷ 尾形聡彦「移民キャラバン 42人を逮捕」『朝日新聞』2018年11月27日、11頁。
- ⁸ 岡田、前掲、2018年11月5日、6頁。最近の活動として非営利団体 Pueblo Sin Fronteras (1987年設立)は、2018年3月25日に中米から数百人規模の集団をアメリカの国境へ案内したが、その多くはメキシコで留まった。Katie Rodgers. “As Refugee Caravan Heads North, Trump Rails Against DACA and Nafta.” *New York Times*, April 2, 2018, p. A15; Kirk Semple. “Migrant Caravan Reaches U.S. Border: Journey Isn't Over.” *New York Times*, April 25, 2018, p. A4
- ⁹ 土佐茂生「恐怖あおるトランプ氏 中間選挙に利用」『朝日新聞』2018年11月5日、6頁。近年、欧米で蔓延している「移民パニック」の悪用については、ジグムント・バウマン (伊藤茂訳)『自分とは違った人たちとどう向き合うか—難民問題から考える』青土者、2017年(Zygmunt Bauman. *Strangers at our Door*. Polity, 2016)を参照。
- ¹⁰ 浦野直樹、笹川翔平「改正入管法成立へ 外国人労働者受け入れ拡大」『朝日新聞』2018年12月8日、1頁。Sayo Sasaki. “Foreign worker integration key.” *Japan Times*, December 9, 2018, pp. 1-2
- ¹¹ 浦野直樹、笹川翔平、前掲。
- ¹² 厚生労働省『「外国人雇用状況」の届出状況まとめ【本文】(平成30年10月末現在)』
<https://www.mhlw.go.jp/content/11655000/000472892.pdf>
- ¹³ カナダ統計局のデータによると2018年7月1日現在の人口は37,058,856人である。Statistics Canada. “Table 17-10-0005-01 Population estimates on July 1st, by age and sex.” <https://doi.org/10.25318/1710000501-eng>
- ¹⁴ 木村和男、吉田健正「多様性と統合—歴史的概観」ダグラス・フランシス、木村和男編『カナダの地域と民族—歴史的アプローチ』同文館出版、1993年、3頁。
- ¹⁵ タマラ・パーマー・セイラー「多文化主義の展開」ダグラス・フランシス、木村和男編 前掲書、264頁。
- ¹⁶ 飯野正子『日系カナダ人の歴史』東京大学出版会、1997年、19頁。
- ¹⁷ 木村、吉田、前掲書、31-32頁。
- ¹⁸ 1989年にトロント市の中心市街地に設置された Eldon Garnet と Francis Le Bouthillier の中国人労働者を追悼する彫刻には4000人以上が犠牲となったと記されている。「線路1マイルにつき、中国人が一人犠牲になったと言われている」(“They say there is one dead Chinese man for every mile of that track”)は1992年に Historica-Dominion Institute が制作し、カナダのテレビで放映された *Heritage Minutes* の短編映画 *Nitro* からの台詞である。
- ¹⁹ 木村、吉田、前掲書。
- ²⁰ 現在のエースト・ペンダー・ストリートは1904年頃までデュポント・ストリートと呼ばれていた。
- ²¹ Kay J. Anderson. *Vancouver's Chinatown: Racial Discourse in Canada, 1875-1980*. McGill-Queen's University Press, 1991, p. 64
- ²² *ibid*, p. 68
- ²³ *ibid*, p. 67
- ²⁴ *ibid*.
- ²⁵ *ibid*, p. 68
- ²⁶ 飯野、前掲書、5頁。
- ²⁷ 同上、15頁。
- ²⁸ 同上、29-30頁。
- ²⁹ 同上、45-48頁。
- ³⁰ 同上、105-112頁。
- ³¹ Anderson, pp. 139-141
- ³² *ibid*, p. 214
- ³³ Katharyne Mitchell. “In Whose Interest? Transnational Capital and the Production of Multiculturalism in Canada.” Sourayan Mookerjee, Imre Szeman, and Gail Faurschou, eds. *Canadian Cultural Studies: A Reader*, Duke University Press, 2009, pp. 344-365
- ³⁴ Statistics Canada. *Vancouver, CY [Census subdivision], British Columbia and British Columbia [Province] (table). Census Profile. 2016 Census. Statistics Canada Catalogue no. 98-316-X2016001. Ottawa. Released November 29, 2017. <https://www12.statcan.gc.ca/census-recensement/2016/dp-pd/prof/index.cfm?Lang=E> (accessed August 26, 2019).*
- ³⁵ 1903年頃から英領インドの元兵士もバンクーバー港に到着するようになり、多くの場合、中国人や日本人移民と同じ船に乗っていた。Ali Kazimi. *Undesirables: White Canada and the Komagata Maru*. Douglas & McIntyre, 2011を参照。
- ³⁶ 現代カナダの多文化主義を巡る問題について多数の視点や見解がある。例えば、Himani Bannerji. “On the Dark Side of the Nation: Politics of Multiculturalism and the State of ‘Canada’.” Sourayan Mookerjee, Imre Szeman, and Gail Faurschou, eds. *Canadian Cultural Studies: A Reader*, Duke University Press, 2009, pp. 327-343; May Chazan, Lisa Helps,

Anna Stanley and Sonali Thakkar, eds. *Home and Native Land: Unsettling Multiculturalism in Canada*. Between the Lines, 2011 などを参照。

³⁷ 木村, 吉田, 前掲書, 42 頁。

³⁸ Truth and Reconciliation Commission of Canada. *Honouring the Truth, Reconciling for the Future: Summary of the Final Report of the Truth and Reconciliation Commission of Canada*. 2015.

http://www.trc.ca/assets/pdf/Honouring_the_Truth_Reconciling_for_the_Future_July_23_2015.pdf

³⁹ Jeff Sommers, Nick Blomley. “The Worst Block in Vancouver.” Reid Shier ed. *Stan Douglas: Every Building on 100 West Hastings*, Arsenal Pulp Press, 2002, p. 31

⁴⁰ Denise Blake Oleksijczuk. “Haunted Spaces.” Reid Shier ed. *Stan Douglas: Every Building on 100 West Hastings*, Arsenal Pulp Press, 2002, p. 98

⁴¹ Leslie Robertson, Dara Culhane. *In Plain Sight: Reflections of Life in Downtown Eastside Vancouver*. Talonbooks, 2005, p. 16

⁴² Ian Austen, Dan Bilefsky. “Canadian Inquiry Describes Killings of Indigenous Women as Genocide.” *New York Times*, East Coast Late Edition, June 4, 2019, p. A4

⁴³ 文部科学省が2019年1月31日に公表したデータによると、日本の大学などが把握しているカナダへの留学生数は2016年度には8908人、2017年度には9440人であった。これによると、カナダはアメリカとオーストラリアに次いで日本からの学生が三番目に多い留学先となる。『「外国人留学生在籍状況調査」及び「日本人の海外留学先者数」等について』

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/_icsFiles/afieldfile/2019/01/18/1412692_1.pdf

⁴⁴ 澤田信一「浦富の別荘で鍛錬」鳥取県立公文書館編『澤田廉三と美喜の時代』2010年、33頁。

⁴⁵ 終戦直後、日本政府は占領軍用に特殊慰安施設協会を設置し、基地周辺では性産業が活発化した。また、売買春や強姦とは別に通訳や基地周辺のサービス産業で働く女性と占領軍の兵士の間で親密な関係が結ばれる場合もあった。敗戦後の経済不況の中の限られた生存戦略の結果として、または制限づけられた移民・結婚制度、人種的偏見などにより日本の女性と占領兵の間で生まれた子供の多くは孤児になった。Paul R. Spickard. *Mixed Blood: Inter-marriage and Ethnic Identity in Twentieth-Century America*. University of Wisconsin Press, 1989, pp. 123-158; 下地ローレンス吉孝『「混血」と「日本人」—ハーフ・ダブル・ミックスの社会史』青土社、2018年、71-72頁。

⁴⁶ 澤田美喜が1963年に著した自伝によると、その時点では700人以上の子供を養っていた。沢田美喜『黒い肌と

白い心—サンダース・ホームへの道』ほるぷ、1980年、260頁。

⁴⁷ 日本テレビが発行した『子供たちは七つの海を越えた—エリザベス・サンダース・ホーム』（1979年）によると、ホームの1600人のうち、800人は養子縁組、留学、結婚などで海外に渡った。